

*** 塔望遠鏡近くに色鮮やかな犬のような動物が！**

この記事はアーカイブ室新聞の記事に相応しくないとクレームが付くかもしれないことを承知で書く。筆者はアーカイブ室の仕事の一つとして、毎日朝夕の2回、天文機器資料館と塔望遠鏡に設置した除湿機の水の始末をしている。ちょっとしたミスで連続運転できる除湿機を買い損ねたことと、連続運転のために排水が出来ない場所に設置せざるを得なかったことがその原因なのだが、やむなく他の人が見れば馬鹿な仕事を続けている。休みの日には朝、朝食前に天文台に出かけ、除湿機の水の始末をしている。今日は12月23日、天皇誕生日で休みである。家を6時30分ころには出かけた。南の空、雲一つないまだ薄暗い空に金星が輝いていて気持ちがいい。自転車を走らせ天文台に行き、まず天文機器資料館の除湿機の水の始末、望遠鏡フロアの除湿機の湿度計は51%を示している。続いて塔望遠鏡に向かい、自転車を降りようとしたところで、塔望遠鏡の半地下の分光室の東側空き地に、色鮮やかな色の犬のような動物がいたが、すぐに姿を消した。塔望遠鏡玄関あたりまで行き、南の斜面を見たがすでに雑木林のブッシュの中に消えて姿は見えなかった。見た時の印象は、姿は犬だが、色が「てん」のように鮮やかな黄金色だったのである。ただそれだけのことだ。塔望遠鏡の建物は昨年暮れに雨漏り修理のドームの銅板取り換えの大修理、昨年度末の電気回復工事までは「たぬき」の住処になっていた場所で、自然換気の通口が「たぬき」の通用口になっていて、狸と顔を合わせたこともあった(写真1)。



写真1 自然換気通風口の中の「たぬき」

この黄色っぽい動物を見た瞬間に「きつね」と思った、しかし「きつね」の特徴的な尻尾が見えなかった。「てん」のような鮮やかな黄色の柴犬くらいの動物がいて、すぐに雑

木林の中に消えた。初め狐かと思ったが、尻尾が見えないうちに消えてしまった。こんなことを書いても信じてはもらえないかもしれない。このあたりで野良猫を見たことはあったが、犬は見たことがない。天文台の東、北側を除いて完全に万年塀で囲われていて野良犬が入ってくることはないし、今は野良犬そのものがない。

筆者は、ハワイに建設した大型光学赤外線望遠鏡「すばる」の建設期間、標高 4200m のマウナケアに通っていた。その頃ある事情があって高所順応の時間つぶしに山頂近くにある「シンダーコーン」と呼ばれる火山噴火の形状を保った「噴石丘」の踏破をやっていた時期があった。その時、寧ろ形の悪い一つの「噴石丘」の頂きを歩いていた時、「シンダー」と呼ばれる火山の噴石の中に水晶玉のような透明な「玉」(写真 2)を発見したことがあった。この「不思議な玉」は持ち帰って、今でも大切に保管しているが、このように人に話しても信じてもらえないよう話があるのである。



写真 2 噴火丘頂上のシンダーの中にあつた「不思議な玉」

このすがすがしい冷気の中の朝早い天文台の景色はすばらしい。東京の冬は天気がいい、筆者は昭和 48 年頃から東京天文台構内の「卯酉儀」と呼ばれた望遠鏡を占有して、晴れてさえいれば変光星の観測に明け暮れていた時代があった。冬の関東地方は世界でも有数の天気のいい場所で、朝、日の光りを浴びながら官舎に帰っていた頃を思い出すのであった。